

母性看護学実習ローテーション制を取り入れた効果 — 母性看護技術チェックリストと授業評価から —

中越 利佳*, 北原 悦子*, 上野 恭子*, 今村 朋子*
森 久美子*, 高田 律美*, 井上 明子*

The Effect of Maternal Nursing Clinical Practice with Rotation System — An Investigation of The Maternity Nursing Skills Checklist and Maternal Nursing Practice Evaluation. —

Rika NAKAGOSHI*, Etuko KITHARA*, Kyoko UENO*, Tomoko IMAMURA*
Kumiko MORI*, Norimi TAKATA*, Akiko INOUE*

Key Words : 母性看護学実習 実習施設ローテーション 授業評価 母性看護技術経験

序 文

臨地実習とは、学生が学内で修得した専門的知識・技術・態度を看護実践の場面に適用し看護活動を展開することであり、知識と技術との統合を図るプロセスが重要である¹⁾。少子化・核家族化に伴い多くの学生は、妊婦や新生児に接した体験が少ない。それゆえ、母性看護学実習での妊産婦、新生児とのかかわりが対象理解につながっていく。

しかし、分娩件数の減少やハイリスク妊娠・出産の増加により、受け持ちケースの選択に苦慮している現状がある。また、対象者の入院期間が短く、実習目的に掲げた内容を習得することが難しい状況でもある。

本学の母性看護学実習は、平成21年度まで2施設に別れて2週間の実習を行っていた。実習内容は、受け持ち対象者の看護過程の展開と外来実習および分娩室実習であった。A施設は、四国で唯一のBFH (Baby Friendly Hospital) 認定病院で、母乳育児支援に力を注いでいる施設であり、褥婦と新生児を受け持ち、看護過程の展開をとおして母乳育児支援の実際についての理解を深めることができていた。また、分娩件数も多く例年6割程度の学生は分娩見学ができていた。B施設は、ハイリスク妊娠、帝王切開術が多い施設である。B施設では、受け持ち対象者がハイリスク妊婦となることが多く、切迫早産、多胎、妊娠高血圧症候群などの看護過程の展開が主流となり、褥婦と新生児を受け持つことのできる学生は少なかった。経膈分娩例数も少なく、帝王切開術の見学で分娩期実習を代替することも多かった。実習最終日に

2施設の学生による合同カンファレンスを開催し、学びの共有化を図ったが、学生の実習環境の平等性の視点で課題が残った。

そこで、全ての学生がBFHやハイリスク妊婦の看護を体験できるように施設側と交渉し、平成22年度から1週間毎に施設をローテーションする方法に変更した。A施設では褥婦と新生児を受け持ち、産褥期・新生児期の看護過程の展開、および分娩室実習を行い、B施設では、産婦人科外来実習、ハイリスク妊婦の看護、新生児室実習と実習内容を区別した。各施設での実習目標と実習項目を明確化するとともに、指導体制として、ローテーションに合わせて学生とともに移動し、2週間をとおして学生の理解度をみる教員と施設担当で毎週交代する学生の実習調整を担う教員を配置した。

ローテーション制を導入してから2年が経過し、実習効果として有効であったかを検証することが必要であると感じた。本研究は、実習施設を固定化していた平成21年度とローテーション制を導入した平成22・23年度の母性看護技術経験状況と母性看護学実習授業評価の変化を分析し、実習ローテーション制導入の評価を行うとともに、課題を明確化し、効果的な実習指導の在り方を検討する目的で実施した。

方 法

1. 研究対象

平成21～23年度に母性看護学実習を終了した看護学科生180名

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

2. 研究方法

平成21～23年度までの本学FD授業評価アンケート（臨地実習用）と実習後に提出された母性看護学技術チェックリストからデータ収集を行った。母性看護学技術チェックリストは、妊娠期の看護技術16項目、分娩期の看護技術18項目、産褥期の看護技術15項目、新生児期の看護技術28項目からなり、「1.見守り・一人で実施」、「2.臨地実習指導者および教員とともに実施」、「3.見学」、「4.経験なし」を自記式単一回答法にて求めた。データ分析は、Excel2007に入力し、記述統計処理を行い、各年度の比較を行った。

3. 倫理的配慮

FD授業評価アンケートはFD委員会の規定に従って、アンケート回収を行った。母性看護学技術チェックリストは、記載方法説明時、結果は今後の実習改善や研究に使用する等の趣旨を説明し、同意を得た。

結 果

対象学生のうちFD授業評価アンケートを提出した学生は、平成21年度49名、平成22年度45名、平成23年度46名で回収率は77.8%であった。母性看護学技術チェックリストは全員提出された。

1. 妊娠期の看護技術経験

妊娠期の看護技術経験率（見学含む）を図1に記す。

妊娠期の看護技術は、ローテーション制を導入した平成22年度から経験率が上昇した。平成23年度では、分娩予定日算出、バイタル測定、子宮底・腹囲測定、レオポルド触診法、胎児心音聴取、NST（ノンストレステスト）、超音波検査、問診、内診介助の技術において、80%以上の学生が経験できていた。

2. 分娩期の看護技術経験

平成22年度は、平成21年度と比較し、分娩期の看護経験率はおよそ2/3から3/4に減少した（図2）。平成21年度は2週間の実習期間があったため、分娩予定者に合わせて分娩室実習時期を調整することが可能であった。しかし、平成22年度からは分娩室実習は1日間だけとなり、その日に分娩がなければ、分娩見学の機会を失っていた。2年目は、分娩予定者がいない場合は分娩室実習を病棟実習に変更したり、また、病棟実習であっても分娩予定者がいる場合は、褥婦と新生児の看護を行いながら分娩見学を組み入れる等流動的に学生配置を行った。その結果、バイタル測定、内診介助、胎児心音聴取、陣痛測定、リラクセス、産痛緩和、胎児・胎盤・付属物の娩出、母子対面、産婦の観察、カンガルーケア（STS）、悪露観察、胎盤計測・観察において60%以上の経験率となった。また、分娩見学率は67%まで上昇した。

3. 産褥期の看護技術経験

平成21年度と比較し、平成22年度からはすべての項目で経験率が上昇した。（図3）バイタル測定、乳房観察、

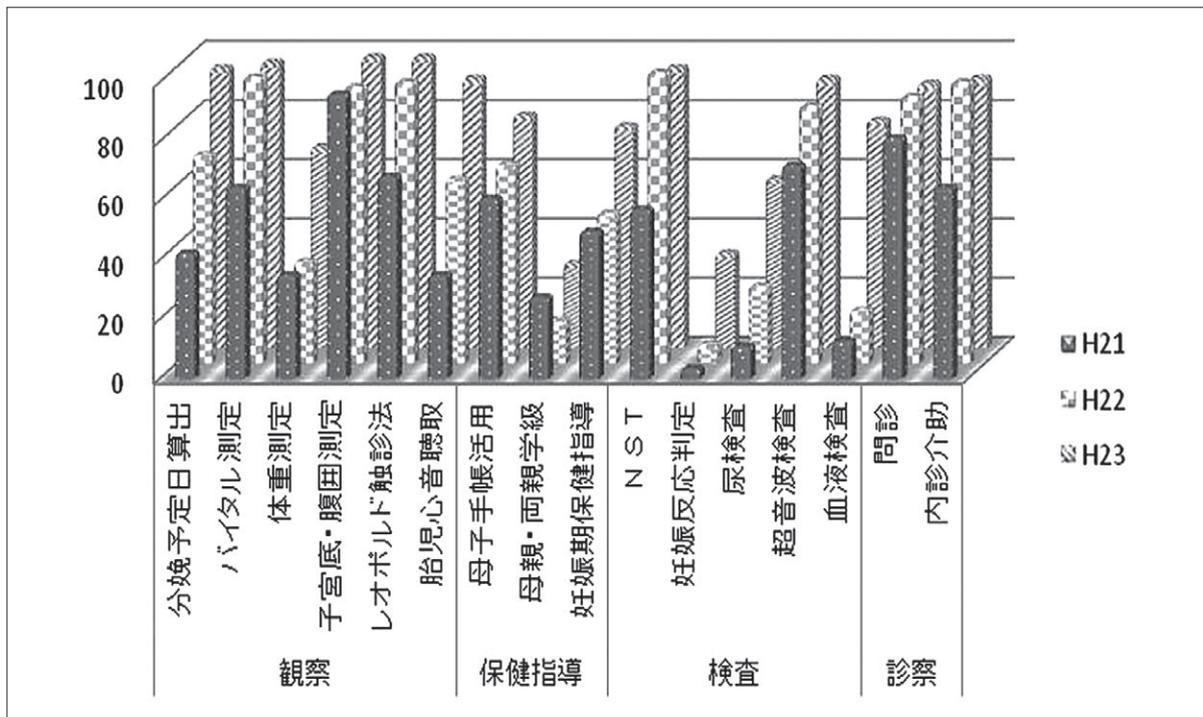


図1 妊娠期の看護技術経験率

授乳指導は90%以上の学生が経験している。また、産褥期に行われる保健指導は、見学が主ではあるが、80%以

上の学生が経験することができている。

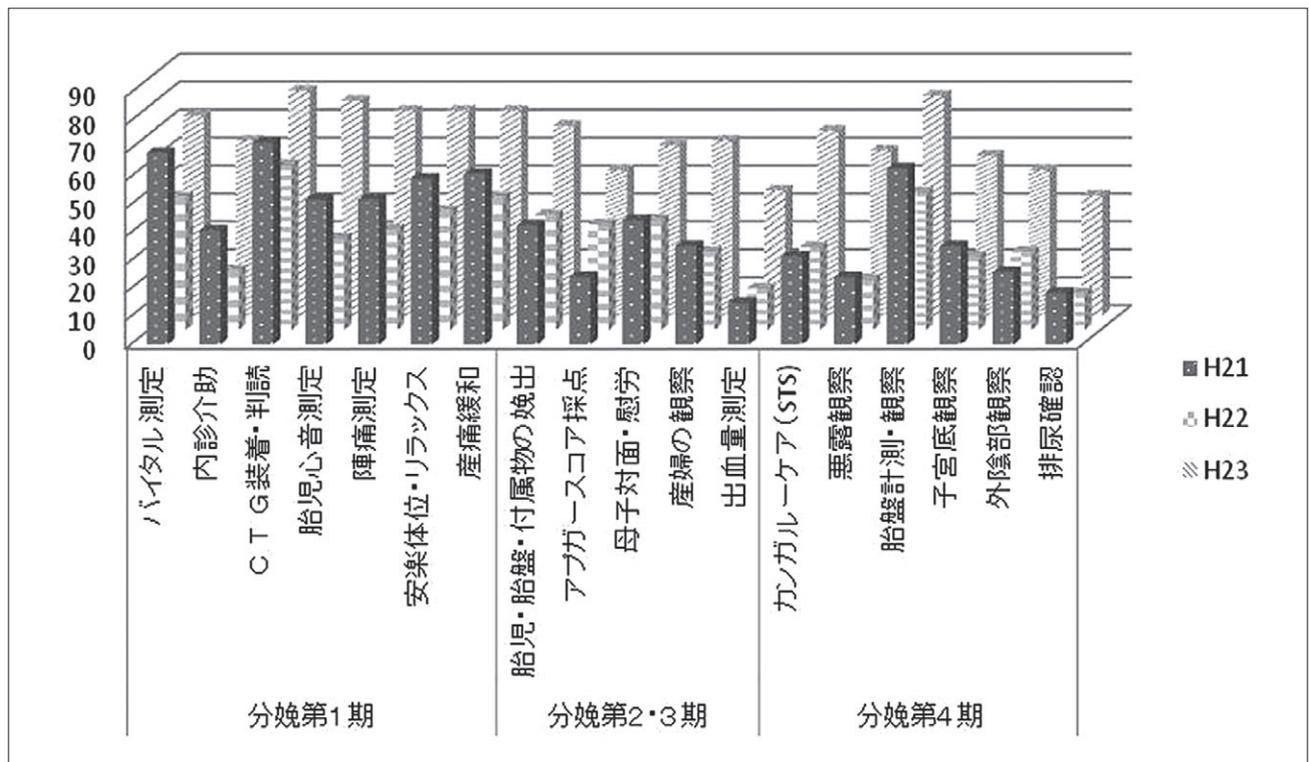


図2 分娩期の看護技術経験率

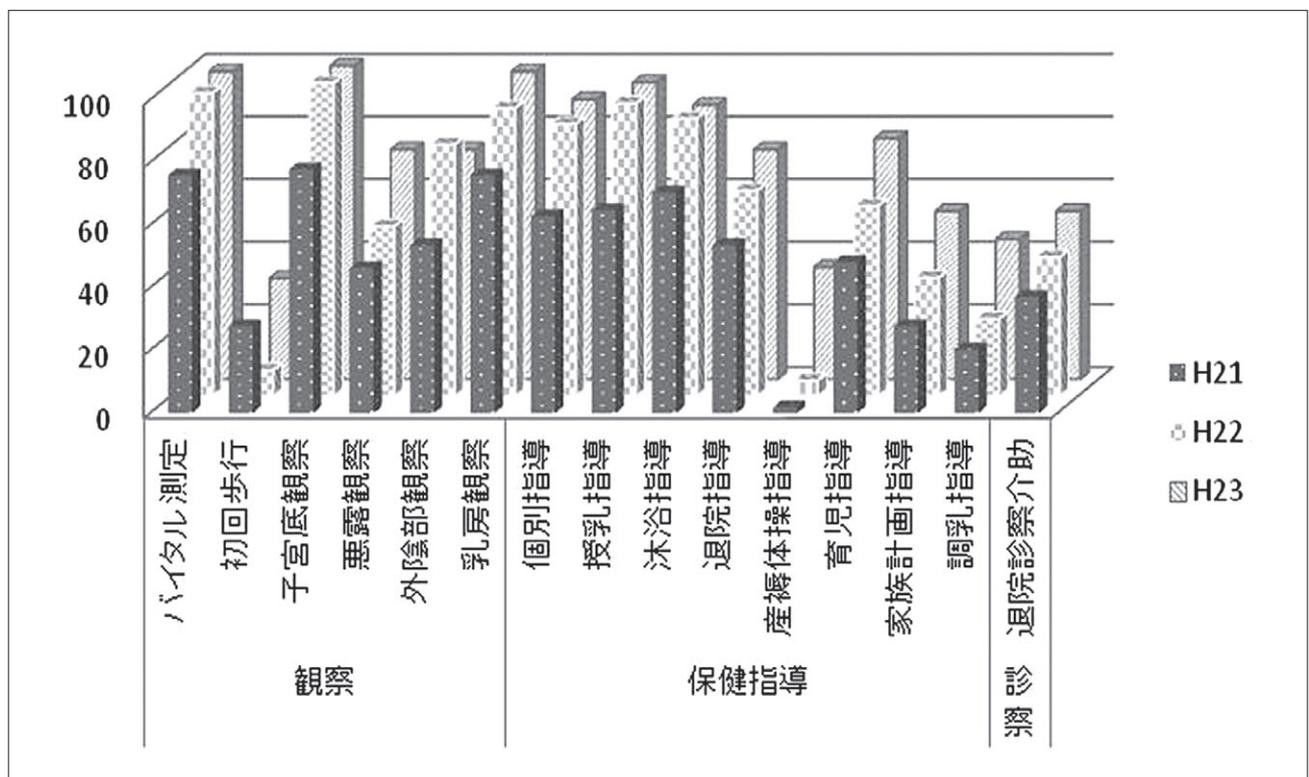


図3 産褥期の看護技術経験率

4. 新生児期の看護技術経験

新生児期の看護技術経験率も妊娠期・産褥期と同様に、ほぼすべての経験項目において上昇した(図4)。特に新生児の観察および日常生活援助は、100%に近い経験率であった。

5. 臨地実習授業評価

3年間の臨地実習授業評価を図5に記す。過去3年間の評価に大きな変化は認められなかった。しかし、難易度・内容量の評価が低下傾向を示した。

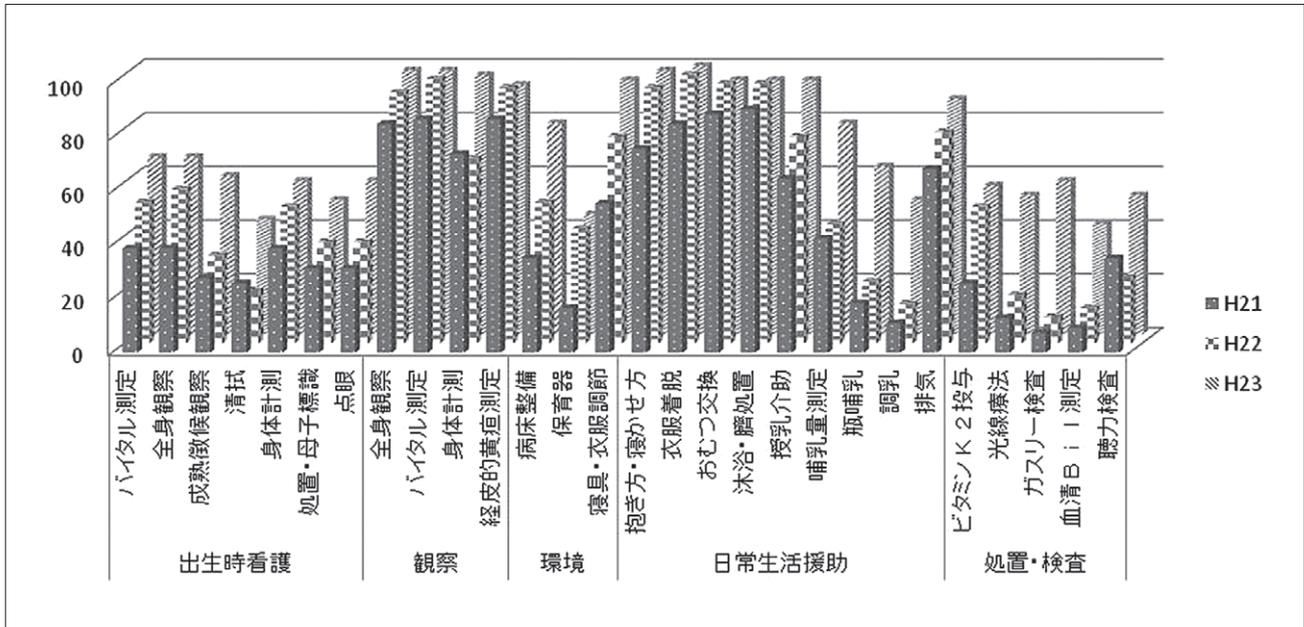


図4 新生児期の看護技術経験率

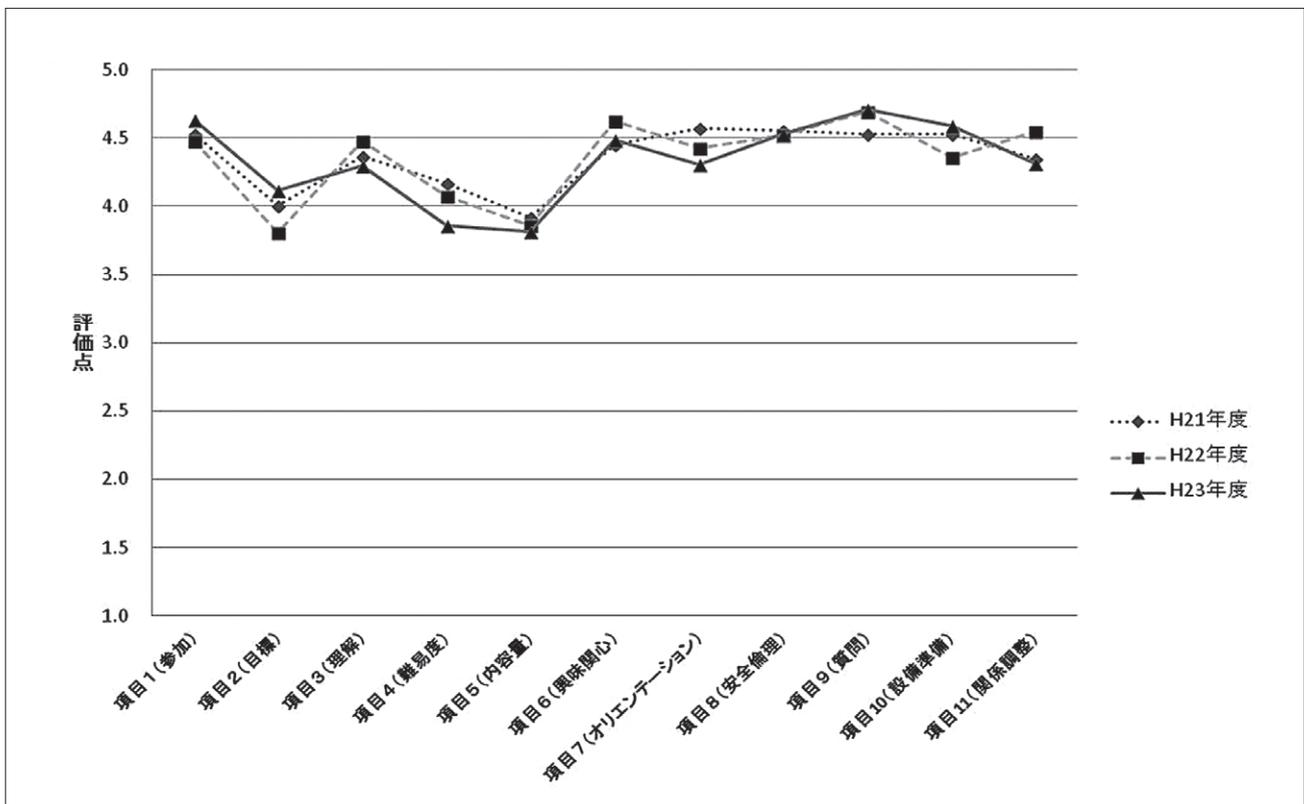


図5 母性看護学実習授業評価

考 察

1. 母性看護学技術経験率から

ローテーション制を導入することにより、母性看護学技術経験率は大幅に上昇した。先行研究では²⁾³⁾、レオポルド触診法、NST、内診介助、分娩予定日算出は30～40%の経験率であるのに対し、本学は90%以上の経験率を示している。経験率の高さから、妊婦や胎児の健康状態をアセスメントする機会が多く、対象理解につながったものと推察する。

分娩期の看護技術経験率は、分娩室実習の学生配置に流動性を持たせることで上昇し、先行研究²⁾³⁾と比較しても高い経験率を示した。特に、分娩第1期の看護技術は全ての項目で60%以上であり、分娩経過とともに刻々と変化する産婦を身体的・心理的にアセスメントし、支援していくことの重要性が理解できたと推察する。

産褥期実習は母性看護学実習の主軸であり、子宮底観察、乳房観察などはほぼ100%に近い学生が経験できており、退行性・進行性変化の実際が理解できたものと推測する。ローテーション制の導入により、すべての学生がBFHの細やかな母乳育児支援の実際を学ぶことができ、母乳育児への理解を深めたことが大きな成果であると考えられる。先行研究²⁾³⁾との比較においても、乳房観察、授乳指導の経験率は高率を示しており、ローテーション制の導入効果は大きいと考えられる。

新生児期の実習は両施設で行われる。A施設では、母子を受け持ち、BFH、母子同床システムから母子一体として看護する視点を学び、B施設では主に新生児の観察および沐浴等の日常生活援助、新生児室の管理を実習する。学生は2施設で新生児とかわかっているため、新生児期の看護技術を経験する機会に恵まれている。新生児の観察、日常生活援助は100%に近い経験率であり、母性看護学実習の主軸となる産褥・新生児期実習が充実したといえる。また、新生児の身体的特徴や生理的变化を繰り返して観察する機会に恵まれたことで、新生児の理解が深まったと推察する。

2. 臨地実習授業評価から

母性看護学実習に限らず臨地実習は学生にとって、学内での学習とは一変した環境であり、その場に適應するにはかなりの時間を要する。ローテーション制の導入により、2週間の実習期間といえども、実際は1週間で交替するため、学生にとっては、実習施設に慣れたところに実習が終了するといったストレスフルな状況下におかれていたものと推察する。

しかしながら、授業評価からは実習施設を固定していた時とほぼ変わらない評価となり、実習への満足度もおおむね高いことが示された。これは、各実習施設での実

習内容と目標を明確に学生に伝えたこと、実習指導教員は、施設担当で実習調整をメインとする教員と学生のローテーションに合わせて移動する教員を配置し、実習環境を整え、学生個々の実習進行状態や理解度に合わせた指導ができる体制を取ったことが影響していると推測する。福山らは⁴⁾、時間をかけて知識を確認しながら共に考える姿勢を示すことが学生の実習成果を上げることに繋がるとしており、今後も学生の心理的負担を軽減し、体験と知識が繋がるような丁寧な実習指導を目指して指導体制を強化していきたい。

反面、実習の難易度と内容量は年々低下傾向を示しており、学生の実習施設ローテーションへの適応不安や負担感があるのではないかと推察する。母性看護学実習は、一人の対象者にじっくりかかわることができる他の領域実習とは違い、複数の対象者とかわらなければならない。特にA施設では、産褥・新生児期実習中であっても、分娩予定者がいれば分娩期実習に変更となる。オリエンテーションで、いつ分娩があっても対応できるように事前学習を十分に行っておくように説明はしているが、計画どおり予定した実習内容をすすめていくことに慣れている学生にとって、突然の予定変更には戸惑う者も少なくない。また、実習記録は各施設の実習が終了する時点で提出しなければならないことに負担を感じる学生も多い。これらのことが、実習内容量の多さと実習の難易度を上げてしまった要因ではないかと推察する。今後は実習記録の内容を見直し、学生の負担を軽減していくと同時に、分娩見学などによって実習計画が変更する場合は、学生がその変化に対応できるように指導内容を強化するなどの配慮を行っていきたい。

なお、本研究は母性看護学技術経験と授業評価から実習方法の効果を検証したが、今後は、学生の心理的变化や主観的学びからも実習効果を検証していきたい。

引用文献

- 1) 堀内成子(2008)：母性看護実習ガイド. p.1-8, 照林社
- 2) 笹木葉子, 小堀ゆかり(2012)：母性看護学実習における学生の技術経験状況調査－学生の母性看護学実習技術チェックリストから－. 北海道文教大学研究紀要, 36, 81-91
- 3) 成田恵美子, 渡邊竹美, 糠塚亜紀子, 他(2007)：母性看護学実習における学生の看護技術経験の認識に関する調査. 秋田大学医学部保健学科紀要, 15 (1), 58-67
- 4) 福山浩美, 一花詩子, 稲尾公子(2007)：本学における母性看護実習の現状3－指導体制・学習環境・実習成果－. 埼玉医科大学短期大学紀要, 18, 67-76

要 旨

本研究の目的は、母性看護学実習において実習施設をローテーションすることによる学習効果を過去3年間の学生の授業評価と母性看護技術チェックリストの経験率から検討し、効果的な実習指導の在り方を検討するための基礎的資料とすることである。

妊娠期・産褥・新生児期の見学を含めた技術経験率は、ローテーション制を導入1年後は大幅に上昇した半面、分娩期の技術経験率は低下した。2年目では、分娩期実習方法を変更したところ、分娩期技術経験率は上昇した。

学生の母性看護学実習授業評価では、ローテーション制導入後も大きな変化はなく、おおむね満足できている結果となった。しかし、実習難易度と内容量が低下傾向を示しており、ローテーションによる学生のストレスや短期間でこなさなければならない課題が多いことが原因であると推察された。実習記録の整備や実習指導体制の強化が今後の検討課題である。